

---

# 真・真剣恋無双

結城光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・真剣恋無双

### 【Nコード】

N1615W

### 【作者名】

結城光

### 【あらすじ】

ひよんな事から九鬼財閥のゲーム開発を手伝う事になった風間フアミリー。しかしそれはとんでもない波乱の幕開けだったのだ

オリジナル主人公を交えての真剣恋×恋姫無双です。ある意味クロスオーバーしているので、普通の真剣恋が見たい人はそのままバツクで。

(こちらは短編としてあげました。真剣で俺が恋をする！？の方と全く同じです)

ある日の放課後。キャップがルー先生や巨人に呼ばれて、いつもの賭け場所に行くと言う話が入ってきた。いつもならあまり大勢で来ないでくれという要望により、俺達風間ファミリーの中からはキャップが出て行くだけとなっている。

形式はオークションと同じで、報酬は成功で支払われる。主に食券とか図書カードだが、お金の足りない俺たちには十分なものだった

「おい、海斗お。大和知らね？」

しかしキャップは先生達に呼ばれたと思ったのだが、何故かこの教室に戻ってきている。

しかも我らが軍師をご所望とは何かあったのかよ？

「今大和ならどっか行ってる。主にここの激辛魔人の手によって」

「クツク。褒めても何もでないヨ、海斗？」

「褒めてねえ!？」

ニヤニヤしながらいつもの10goodの札を掲げる京。隣のワン子は何を言ってるのか分からない様子だし、クリスはさっき出て行った大和を探しているみたいだ

モロとガクトはそもそも会話に参加できてないから除外。ほらっ、今だってヨンパチと一緒にエロについて語ってやがる。ああ、モロは違ったか。スグルと一緒に新作のロボットアニメの話をしてるなえ〜っど何だっけ？ ゴンダムアゲ？ 何かそんな感じの名前だった気がする

「そつか、んじゃ海斗でいいや。ちよつと着いて来てくれ」

「ん？ キャップは先程ルー先生に呼ばれてなかったか？」

クリスがさつき俺が思った事をそのまま質問する。これがクリスの長所でもあり、短所でもある

こうやって自分の思った事をすぐに口に出してしまう。それで俺たちと1度衝突してしまったのも記憶に新しい出来事だ

「ああ、その事でなんだけどな。何か今回は特殊みたいで、もう何人か人を連れてきていいらしいんだ。だから大和に頼もうと思ったんだがアイツいねえから。だから代わりは」

「大和より軍師としては能力は落ちるけど、頭の良さならそれ程変わらない海斗を選んだって訳ね」

「そそ。何か頼りになりそうだし。なつ、ファミリーの兄的な存在」

オイ、その話何処で聞きやがった！？ 確かアレはかなり前に、麗子さんがファミリーのお父さんの存在だねって言った時に俺が言った言葉だぞ。

ありえん……。まさかクッキーかなんかが情報を流してるんじゃないだろうなあ？

「まあいい。朝ごはんのウインナー3本で付いて行ってやるう」

「え、そこはただで請け負ってくれよあ」

「依頼には報酬が付き物だぞ？」

ぶーぶー言いながら色々考えているキャップ。まあ即座に断らない時は大体要望が通る時だ  
本当に嫌だったら即答でヤダって言うし

「たまご焼き1個とウインナー2個」

「よし、乗った」

契約成立によつて今食べていたパンをすぐに口の中に入れて席を立つ。

いつもの賭博場に歩いていく。俺もたまにここに足を運ぶが勝率は5分つとこだ。負けた分は大和に取り返してもらっているので、あまり損はしていない……はず

「今回は何の依頼なんだよ？ 他の人を連れて来ていいなんて、よっぽどだろ？」

「なんかなあ、九鬼のヤツが依頼主なんだよなあ。横になんかあずみも付いてたからうるさくって内容はほとんど聞いてねえ」

確かにあずみの猫かぶりは酷いもんだよな。つてかアイツの年齢は大丈夫なのか？ 絶対俺たちよりも何歳か年上なのは明らかだし、1回大学卒業してもおかしくないようなお年頃のはず……

「もっかい聞いてみれば教えてくれるだろう」

「だといいんだけど……」

俺はなにかが肩に乗ったような感覚に見舞われながらも、俺は

賭けの行われている教室のドアを開いた。そこに居たのはほとんど見慣れた顔。京が行ってる弓道部の主将と、2・Sの井上準。後は……知らん。依頼主の英雄とあずみとルー先生と巨人が居るくらいだ。弓道部は助っ人としてえ〜っと、誰だっけ？ ムサコツス？ を連れてきてるのに、準は誰も連れてきてない。いや、多分断られたんだな。可愛そうに  
小雪はしょうがないけど、葵は来てやれよ

「皆の者、よく集まってくれた!!」

「感謝するぞ、愚民共」

うっはー、あずみさんマジですか……。英雄の前でも絶賛毒舌を吐いているのに、猫かぶりは健在ですか。一応先生居るのに、やつぱり英雄以外はどうでもいいって事だな。いいんじゃないか、そういう考えは。でももう少し位普通にしようぜ？

「今回の競は2組って事になってる。内容をよく聞いて、やってくれ。それじゃあ忍足、頼んだぞ」

そういつて巨人は近くに置いてある椅子にさっさと腰掛ける。ルー先生は何か言うかと思えば、隣で微笑みながら立ってるだけ。まあ教師公認だからこれは別に何も言われないよな

「あつ、英雄様。そろそろ会議のお時間ですう!!」

「おお、そうだったなあずみ!! 悪い、皆の者。我はここで退席させてもらう。あずみ、後は任せた」

「はい、いつてらっしやいませ英雄様」

俺達が来て数分も経たないウチに九鬼退場。まあアイツは本当に九鬼財閥の仕事で忙しいのはみんな知っているが、それでも行かないでくれと願う人は少ないだろう。実際俺も九鬼には行って欲しくは無かった。しかしそんな願いなど叶うはずも無く、彼は迎えに来た人と一緒に風の如く走り去って行ってしまった。

「……はあ。おい、ハゲ」

始まった。ハゲと呼ばれた準が嫌そうな顔をしながら肩をビクつかせる。誰がそんな事を言ったかは百も承知だ。チラリと声のした方を見ると、案の定。あずみが椅子に足を組みながら座ってやがる。しかも先程までのまぶしい笑顔は何処へやら。物凄い不機嫌な顔で、眉間には皺がよっている

「なんだよ……あずみ」

「ああん!？」

やっぱり怖い、あずみ怖い。なんか殺気立っているっていうか、今にも何かの武器が飛んできそうなくらいの殺気だ。いや、もはやその鋭い視線自体が1つの武器なのかもしれない  
実際ここに居る人達が微妙な空気になってるし、準の方はかなりダメージを喰らっているようだし。

「あ、松坂牛パン買ってきてくれ。大至急」

「はあ? んなもん売ってるわけねえだろうが。いくらなんでもそんな無茶な事言うな」

「私が欲しいつつつてんだ！！ さつさと持って来ねえとそのハゲた頭に2度と髪の毛生えねえようにしてやるぞゴラァ！！」

もはや脅した。金利を法律ギリギリまで上げているちよつとアレな金融会社の人達もビツクリの脅した。

とりあえず関東に位置するここで、松坂なんて中部の食べ物を取り寄せるのに何時間かかるのかが疑問だ。

九鬼財閥の力ならすぐに入手できるかもしれないが、準はハゲても高校生なのだからそんな事出来るわけないだろ

「その位にしとけよ、あずみ。さつさと用件言わないと、お前も九鬼に合流できないんじゃないのか？」

「……そうだな。英雄様は今も多忙の身」

ブツブツ言いながらも真剣な表情で考えているあずみ。横では小さく準が手を合わせている

よし、これで借りが1つだな。後でなにか奢ってもらおう

「で、用件は何なんだよ。俺待ちくたびれたぞ」

「このプッレ〜ミアムな私もこれ以上は我慢出来ません！！」

キャップとムサコツスが同時に不満を漏らす。ってかムサコツスって敬語で喋れるんだな。俺あんまり喋った事が無いからわかんないけど、なんかプレミアムしか言わない失礼な後輩だと思ってた

「あ〜わったよ。全く」

そついいながらカバンから紙を取り出し、目を通すあずみ。そうするとその紙をしまつて、後ろの黒板に何かを書き始める。流石というか、あずみはあの超絶猫かぶり以外は、メイドから戦闘まで何でもこなすスーパーメイドらしい。

何であんなに曲がった性格になつたのかは知らないけど

「今回お前らに頼みたいのは英雄様が発案した擬似体感ゲームのテストプレイだ」

「擬似体感ゲーム？」

「ああ、バーチャルリアリティーってヤツだ。これが完成すれば、ゲームの世界やもしもの世界、それに昔の世界までどんな世界でも再現出来る様になるんだ」

確かに物凄い幅の事業を展開しているなら、ゲーム開発を進めるのも当たり前な事かも知れない。しかしバーチャルリアリティーって言うのは、そういつた次元を超えている。モロに聞かないと分からないが、そういつたゲームの開発はまだ世界でされていないはずだし、しかも擬似体感って事は感覚とかが共有されるヤツだから、技術も凄いだろうに

「でもよお、そんなのは九鬼財閥の開発スタッフに任せれば良くねえか？ 何でわざわざ俺達にいい？」

キヤップがだるそうに質問する。そついやあんまりゲームは好きじゃなかつたな、キヤップ

「フィードバックって言うのを知ってるか？」

「ああ、知ってるよ。あれだろ仮想現実の中で感じた事が、現実の自分にも伝わるってやつ」

真つ先に答えたのは意外にも準だった。あのモロと一緒に、いやロリに関して右に出るものはいないと言うほどギヤルゲーをやり込んでいる準がそうだったゲームに詳しいのは意外だった

「おう、知ってんじゃないかハゲ。そうだ、今コイツが言った通り感覚が現実にも伝わっちゃうんだ。つまり何かあったら洒落になんねえんだよ。まだ試作段階だから、うまく調整が利いているとは言いずれえんだ。だから武道に関しては上位を争うこの学園の生徒なら、な？」

まあ確かにウチの学校には普通だとおかしいくらいの強さの人間がゴロゴロ居るよな。それだったら、普通の人間が対処出来ない自体でも対処できるって話か

「だから今回はこんな形で召集掛けて貰ったが、悪いが競って訳にもいかねえんだ。こつちが指名しても構わないか？」

その提案に皆無言で頷く。いや、1名納得してないヤツがプツレミアムに居るが

まあそんな大きなプロジェクトに無理やり参加しようとは誰も思わないわなあ。色々危険が伴うからな

「それじゃあ……如月達と、葵。お前らが来てくれ。他にどうしても連れてきたいって人が居れば別だが、基本は無しで頼む」

真剣な顔で頭を下げるあずみ。その行動は、先程までの素顔を知っている人なら誰でも驚く行動だろう。しかし、あずみは九鬼英雄の



少し涙目になりながら、睨みつけるワン子。まあ襲ってきたりはしないが、コイツが悪いので俺も謝りは絶対にしない。つてか俺が起こさないと梅先生からの鞭を喰らって涙目になるか、そのまま学校に取り残されて夜になってたわ

「京、翻訳頼む」

「海斗起こしてくれてありがとお！！ 私海斗の為なら何でもするわ」

「なるほど、ツンデレか」

「ツンデレじゃないわ！！」

とりあえず元気そうで良かった。とりあえず大和の方を見ると……、居ないぞ？  
代わりにいつもは居ないはずのモロとガクトが珍しく残っている。けど先に聞くのは大和の方だ

「おい、京。大和はどうした、大和は？」

「ああ、何かさつき携帯が鳴っててトイレ行ってたヨ？」

ホントかよ……？ 何で語尾がカタカナになってるとか突っ込んだら負けなんだろうな

いいよ、とりあえず今は皆に話す事を話さないとな

「オイみんな、少し集まってくれ」

キャップと大和というまとめ役がないので、代わりに俺が皆を集める。といつてもここに居るヤツだけで、まゆっちとモモ先輩は後でいいだろう。どうせ2人とも来るの早いし

「ん？ 自分達に何か用か？」

「金曜集会の事はちゃんと覚えているぞ？」

「いやいやそんな心配なんかするか。とりあえず辺りを見渡すけど、部活やら何やらで教室にはほとんど人は残っていない。多分ここで喋つても大丈夫だろう。とりあえず皆を近くに集めて小さな声で今回の概念を、簡単に説明する」

「つと、言うわけで今回の金曜集会でこれについて話し合うから」

「ガクブルガクブル……」

「ククツ。ワン子はほかっておくからね」

九鬼という名前を聞いた瞬間から、ずっとワン子はガクブル状態だった。まあそれはしょうがないから無視の方向でいいけど

「質問は集会の時に聞くけど、何か今どうしても聞きたい事はあるか？」

そう聞くと、先程までじつと聞いていたクリスが少し控えめに手を上げた

「自分が1つだけ聞いてもいいだろうか？」

「ん？ なんだよクリス」

「その、他の人はあまり連れてくるなという話だったが……。マルさんを連れてきてはダメだろうか」

「マルギツテを？」

別に意外という訳では無かった。クリスとマルギツテの仲はここに居る全員は知っていることだし、何よりあの人はかなり強い。何か眼帯を取ると覚醒するとか意味の分からない能力まで付けているから、前はモモ先輩といい勝負をしたほどだ

「マルさんはこの所ずっと休暇を取ってないらしくて。その……息抜きにそうだったのも」

「うーん、確かにそういうのはいいと思うが……」

こういう時に大和が居てくれればいいんだがな。すっぱり決めてくれるし、色々後の事も考えてくれるし……。出て来いよ大和。なんか主に女の人と絡みながら、京に嫉妬の目を向けられつつさあ

「ふふつ、大和君は年上が弱いと見えた」

「そんな事無いですよ、燕先輩」

「キター！！！」

俺は新しいタイプの人になったのではないだろうか！？ それともアレか、ただの人間には興味ないからって言って助けて団を作った団長みたいな能力か。さようか！！

「大和、お前を待っていたア!!」

「うお!? どうした海斗!?!」

「大丈夫だ、お前は俺の代わりにあの席に座って全部聞いてくれ。代わりに俺が燕先輩の相手をする」

返事を聞かないまま俺は大和を教室へ押し込む。正直俺はまとめるのは別にいいが、ああやって後のことまで考えながらするのは苦手だ。戦いならその先を読む事が出来ても、日常生活でそれをやるのはかなり難しい。パターンや条件などが一切無いからだ。そんなのだったらまだ燕先輩の相手をしていた方がマシだ。なんかさつきも困ってる顔してたみたいだし

「ムフフウ。海斗君はそんなに私と話したかったのかなあ?」

出た、お得意のペース。このペースに飲まれたら、絶対に終わる。確実に終わっちゃう

だが心配ない。俺にはこういった状況を幾度と無く掻い潜って来なければならぬ場面が物凄いあった

「そうですね。いやあ燕先輩の顔を見たら、すぐに大和吹き飛ばしたい位でしたよ」

「そかそか。それはいい事だ」

大丈夫、俺はまだ飲まれてないぞ

「ふ〜ん。で、目的は何? 私の好感度アップ? それとも体?

具体的にはおっぱいとかかなあ？」

「んな訳無いでしょ!?!」

そうツッコミを入れた時に気付いた。ハメられたと本当に一瞬だけだが、ニヤリと口を上げた。そしてそのまま地面にしゃがみこむ

「酷い。海斗君から見たら、私の事なんか女じゃないなんて。うう、私はただの話し相手にしかならないんで」

そう言つて涙を流す。いや、性格には腰に隠し持っていた目薬をさしただけなのだが、俺以外はそんなもの見えるわけも無く

「ああ、そんな事無いですよ!! 燕先輩は十分魅力的じゃないですか!!--」

「んじゃ、私の事好き？」

「好きですよ。ああ、もうっ」

自分で選んどいてミスったか? いや、でもあつちはあつちで大変だけどな

「クフフフフ」

アレ? また俺変な発言した?

目の前の燕先輩が今度は声を出して笑っているのだが。発言を思い返してみるけど、別にそんな変な発言は……

「みんな、聞いてえ〜。今私、海斗君から告白されたあー！ー！」

「うわぁあああああ！？」

突然嬉しそうな顔をして2-F、2-S、そして廊下やグラウンドにまで聞こえる声で叫ぶ燕先輩

さあ〜て、俺はどうすればいいんだろ〜。もう死の音しか聞こえないや

階段とかそこら辺のドアを開けたりだとか色んな足音が聞こえてくる。

この後海斗は、燕の声を聞いたファンクラブの集団とその他諸々に揉みくちやにされ、結局金曜集会まで起きる事は無かったらしい

そして次の日

「だ、大丈夫か？ 海斗」

「お、おう。大丈夫だ、クリス」

少し視界が霞むだけで、至って問題は無い。あの後聞いた話だが、結局マルギツテは来ないらしい。何でも、そういつた企業の技術は軍の機密に似ている所があつて気が進まないらしい。

確かにあの人はかなり機密つてのを保持しようとしてるよな。何か質問コーナーでクリスの声を出す時も……。メタな発言はやめよう



大和はモモ先輩のお守りで忙しいか

「ワン子が九鬼を呼べば来るんじゃないかね？」

「おお、それいいねえ」

「ちょっとお、ファミリー売ってどうすんのさあ!?!」

そんな事言っただってなあ。モロが怒るのも分かるけど、かれこれ20分くらいは待つてるぞ九鬼の方が来なくなつて、あずみとか他のメイドが居るだろうに。いや、執事でもいいが

「なあにを人の家の前で騒いでおる!!」

そんな時に甲高い、つてかちっちゃい子の声が出た。九鬼のような男の声ではないし、揚羽さんのように落ち着いた声でもない。つと言う事は自然にこの声の主は分かるわけで

「どうもごうもねえよ。お前らが待たせていたんだろ、紋白」

九鬼や揚羽さんの妹で、1-S所属の九鬼紋白。いつもは執事のヒュームさんとかと一緒に居るのだが、何故か今日は1人で登場

「私の出迎えを待っておったのか？ えらいぞお!!」

「おい、松風。何か言っただれ」

「ですって、松風」

何かとこの紋白から狙われているまゆっちもとい、松風にバトンを託す。正直九鬼家でまともに話せるのは揚羽さんだけだと思ってるから、こいつともまともに相手をしとれん。まあ揚羽さんもたまに暴走するけどな

『おうおう、紋の嬢ちゃん。いくら世界の九鬼財閥だからって、やっつていい事といけない事があるぜー』

「む？ 我が何かしたか？」

こうやって純粹無垢な笑顔を振りまけばいいってもんじゃねえぞ！  
？ いくら飛び級で、俺たちよりも年齢がX歳下だからって……。  
くそう、可愛いじゃねえか  
はっ！？ 今の発言はアレだぞ！？ 可愛いものを愛でるものであつて、そういうのじゃないぞ  
まったく、小学生は最高だとか言うあいつと一緒にするなよ

「おい紋白、揚羽さんはいないのか？」

「おう、百代。揚羽姉様は多忙の身で、今は大阪の方に居ると思っぞ」

さつきからつまらない顔をしていたモモ先輩が、余計につまらない顔をする。おとなしく付いて来たのは、報酬半分揚羽さん半分だったのか。まあ予想はしていたけどな

最近ホントに溜まっているのが表情に見える。こんどじーさんに相談して、俺とかルー先生で抜かないといけないかな。ストレスをでも絶対負けるからあんまりやりたくないんだよなあ

「で、何でお前がこんな所に来てるんだ？」

「おう、そうであった。実はな皆手が離せないから、我が皆を連れ  
てくるように頼まれたのじゃ！」

何？ 九鬼もあずみも手が離せないとかどういう事よ。しかも執事  
の人達までとか……

アレか。何も出来ないかも知れないと思って、初めてのおつかいさ  
せてるのか。

「何か俺様達雑用係みたいになってないか？」

「ああ、自分もそう思う」

「何をごちゃごちゃ言っておる？ 黙って我について来い！！」

結局押し切られるまま、俺達は黙って紋白について行った。ただ  
テケテケ歩く姿はいかにも幼女の愛くるしさを出していて、やっぱり  
り 学生は（ry

これ以上言ったら捕まるからな。俺は健全な学生を目指してるし、  
別にバスケしてないし

「葵達は来ているのか？」

「ああ、あのハゲ達なら先に兄様達の所に行っておるぞ？」

「えっ？ だって俺達は集合時間より早く来て外で待ってたんだぞ  
？」

「そうなのか。兄様はハゲ共を車で迎えに行ったぞ？ 我も少し不

思議に思ってたのだが、何で皆は歩きで来たのだ？」

あつ、今ピシッって言ったよ。主にキャップとモロと京以外。モモ先輩なんか気をあからさまに放出してるよ……。まあ俺もだがあの野郎、俺達をわざわざ指名してきたくせに親友だけ迎えに行くとか……。まあいいさ。後できつちりお金を貰ってやるう、たつぷりとな

「ここの突き当たりを行けば、兄様達がおるはずじゃ」

「ん？ 紋白は来ないのか？」

俺達を廊下の途中まで送ると、来た道をそのまま引き返す。俺はてつきり俺達と一緒に来て、テストプレイを手伝う事だと思っただけか？

「我は金平糖を食べるので忙しいのだ。それに兄様の仕事にはあまり関わらないようにしておるのだ。まだ我は未熟だからの」

「さようか」

「薫、ウチに来る事を考えておいてくれよ。じゃあの」

それだけ言うと、紋白はさっさと消えて行った。まゆっちがいつも以上に困った顔をしながら、その姿を見送ったのは言うまでも無い

「おお、無事に来られたか！ 一子殿」

突き当たりのドアを開けた瞬間にかかってきた言葉がこれだ。一瞬

モモ先輩が殴りかかろうとしていたのを、同じように行こうかと思  
った。大和が前に立ってなかったら完全に殴ってたわ

「クフフ。やっと来られましたか、大和君。それに風間ファミリーの  
皆さん」

「お、おう」

何かを見透かすっつか、色々見られているっつか、そんな感じの視  
線を感じる。しかしそれは大和に向けてなので、俺達には関係ない。  
たじろいであるのは大和だけだし、この場合は大丈夫だ

「まちくたびれたぞー。マシユマロもなくなったしい」

「こらっ、小雪。お前またマシユマロ全部1人で食ったのか？ 太  
るぞ、お前」

「へへー。僕は太らないよお。準がハゲるのと同じにしないでよ」

「お前が剃ったんだろっか!？」

哀れ準。小雪は色々くつろいでるみたいだし、いいですねそちら側  
は!!

「おい、九鬼。さっさと始めようぜ？ 色々あって、ウチのメンバ  
ーの不満が溜まってるとんだわ」

「一子殿、今日は私服を着て愛くるしい。なんて愛くるしいんだ」

聞いてないし。あずみに視線を送るが、いつもの猫かぶりモードで

九鬼を見るから意味がない  
はあ、そこら辺に座ればいいのか？ とりあえず俺達（ワン子以外）  
は空いている場所に座る。もちろん大和だけは、葵の隣に座らせら  
れてるけどな

「早く始めよぉ〜ぜ？ 待ちくたびれたぞぉ〜」

ただでさえあまり乗り気じゃないキャップが、我慢の限界に達した  
ようだ。ゲームをやり始めたら、面白いとか言ってやり込むくせに、  
あんまりゲーム好きじゃないんだよな

つと言つてもそろそろ俺も我慢の限界なので、京に視線を送る。そ  
して京はそのままポケットから、元が何か分からない程赤く染まっ  
たモノを取り出す。そしてワン子に見せ付けながら、彼女を睨む  
つまりは早くしないと、これを無理やり食べさせるぞという事で

「あわわわっ。く、九鬼君。そろそろ始めない？ みんな集まった  
し」

「おう、そうであったな。あずみい！！ 皆を連れて行け！！」

「はい、英雄様」

また移動かと思つたが連れて行かれたのは、隣の部屋だった  
しかしここがまた異様な雰囲気を出している。カプセル型のモノが  
いっぱいあるのだ

例えるならバーロー映画のベイカー街ストーリーに出る亡霊で使ったヤツ

「ささっ、皆さんお入り下さい」

「えっ？ えっ？」

いきなり入れと言われても、どうやってとか色々説明をくれよ

「あつ、説明が無くて困惑してますねえ？ ゲーム内に入れば説明が出るのですが、簡単にご説明させていただきます」

いつまでこんなキャピキャピなんだよ。さつさと元の性格に戻ってもらわないと、俺が辛いわ

「このカプセルとあちらの英雄様がおられる制御装置は繋がっています。で、こちらの装置に入られると擬似的な催眠状態となり、感覚を持ったまま一種の夢の中に入るようになるんです。まあ言ってみればバーチャルリアリティーってヤツですね。もちろんこっちで色々制御してありますので、ゲームの中で死なれても現実では死にません」

「それなら安心だな」

「はい、そんな訳でさつさと入れ」

おい、口調が戻ってきたぞ？ こっちとしてはありがたいが、こんなメイドで大丈夫か？

従わないと、後で色々面倒なので俺達はさつさとカプセルに入る。

中にはヘルメットみたいなのが付いていて、俺達はそこに頭を入れる

「は〜い、それではゲームを起動させて「プツレ〜ミアムタイム」  
うえ！？」

何か嫌な声が聞こえた。具体的には目立ちたがり屋のムサコッスの声

何が起ったのか確認しようと、俺は目の前のカプセルの蓋を押し  
てそのまま外に出ようと……。おい、これ硬いぞ？ もっと力を入  
れて……。オイオイオイオイ、これって内側から開けられないタイ  
プかよお！？ 開かないぞ、これえ！！

「このプッレ〜ミアムな私を置いて始めようとするのはナンセンス  
よ」

「んだとこのガキ！！ 何処から入りやがった！？」

おおい、口調が戻ってますよあずみさん

「によほほ、此方が居るからのう。何故此方と呼ばなかったのだ？」

「……チツ、めんどくせえヤツを」

「それよりも此方達も参加できるのであろう？」

「そんなわけあるか！！ さっさと帰れ！！」

「え〜、そんな冷たい事言わずにい」

「うるさい！！」

そうムサコツスがあずみに近寄った時だった。あずみは単純に近寄  
らせたくなく、手を振り払ったつもりだったがそのせいでムサコツ  
スはよろける。そして近くにあったモノ、つまり不死川の着物を引  
つ張りそのまま倒れる

「によわわわわわあ！？」

そして不死川はそのままこけるが、こける際に人間というものは近くにあるものを掴もうとする。そう、つまりこのバーチャルゲームの根幹と言われる制御装置の乗っている棚にもちろん精密機器だから、色んな事に注意を払っている。しかしバーチャルゲームなんて言うものを作るには、かなり大きな機械が必要だった。そしてその一部分が棚においてあったのだ  
崩れる棚に、響き渡る大きな音。そして次に響くのはアラームの音

「あずみい！？ 何が起こった!？」

「ひ、英雄様!! コイツらが機械を壊して……」

『ガガッ……ゲームを、開始します……ガガッ……ゲームを開始します……』

「お、おい。ウソだろ？ だって、こっちは何もしてないぞ!？」

その言葉を聞いた瞬間、俺達は絶望的な状況だと悟った。ロックされて、内側から開けられない蓋  
壊れているはずなのに、変な音を立てて起動を始めたゲーム。ああ、アレだ。モロが言う所の死亡フラグだ

「おい、お前ら。このゲームはもう『ゲームスタート』……」

そして俺達は、ゲームの世界に飛んでいった

ドスツと言う音と共に、地面に叩きつけられる。唯一の救いは、下の地面が草だった事か？

少し湿気を含みながらも、俺の顔を守ってくれた事に感謝だ

「えっと、みんなは何処に居るんだ？」

周りを見渡すが見知った顔はおろか、人なんか誰も居ない。あるのは何かの木だ

うーん。何か知らないが誤作動で動いたおんぼろ機械は、こうも色々バグってしまったのか。これ、もしかしたらここで死んだら現実世界でも死ぬんじゃない？ だって、フィードバックのシステムも破損してるかも知れないし

「……………まあ、とりあえず歩くか」

とりあえずゲームなら色々やってみるしかないよな？ クリアすればここから出られるかもしれないし、何よりファミリーのヤツらを探さなければ

「あつ、これって桃の木なのね」

何か桃がなつてた。こうやって現物見るのは初めてだな。うん、完全にリアルだ

食べれるのか？ 1つなっているのをもぎ取って、口に運ぶ。普通に味がする。うまい

バーチャルとは言え、ここまでリアルだとは……………

「ん？ あそこに誰がいるか？」

九鬼財閥のクオリティーの高さに驚きつつ、辺りを見回しているとなにやら奥でガヤガヤしている声がある。これが村人Aなら、とりあえず村の場所を聞いてそこに行けばいいよな  
それにしたって、この世界は結構現代から離れているのか？ 目の前の人たちの服装が、やたら昔の格好なのだが

「グヘツへ。お前ら俺達のもんになれや」

「ええ様にしたる。悪い様にはせんから」

「いえ、その……結構ですから」

「桃香に近寄るなあ……！」

「桃香様、お下がり下さい。鈴々、一気に行くぞ？」

えっと、何かあの子達襲われてる？ 女の子3人の周りを男が7人がかりで囲んでるから、怪しいとは思っただけどまさかなあ。いや、もちろん助けるよ？ 助けるけど、向こうは武器いっぱい持っているにこっちは手ぶらかあ。よし、あの先頭のヤツの棒を奪うか

「フンツ。意気込みだけは凄いやうだなあ……！」

よし、今だ……！！

全員が襲い掛かって行った瞬間、俺は地面を蹴り飛ばす。そしてそのまま先頭の男に拳を入れて意識を刈り取る。そして腕からすべり落ちてきた棒をとり、そのまま3人の前に立つ

「なっ！？ お前何処から!？」

「オイオイ。お前ら女の子相手に大人数でかかって行くとか、新手的ナンパって言っても通じないぜ？」

「難破？ なんだコイツ、わけわからん言葉を使うぞ!？」

「ええい気持ち悪い。コイツから倒してしまえ」

なんかカタカナ語が通じないみたいです。そして気持ち悪いって言われました

ええ、我慢の限界を超えるってこういう事を言うんですね。度重なる事を我慢してきた俺も、そろそろ我慢の限界と言うものを超えちゃいました。いいよね、ヤツても？

『うっらあああああああああ』

「10年早いんじゃないボケエ!！」

向かってくる6人を怒りの力増量攻撃で一気になぎ倒す。ガチの刃物を持つてたから、もう少しヤバイ事になるかと思っただけど案外大丈夫だった。にしたって、これは酷い。何、こんな剣とか普通に持つてる時代なの？ 後ろの女の子もなんか剣持つてるし

「えっと、大丈夫？」

「ええ、あっはい!! 助けていただきありがとうございます」

一番後ろに隠れていたってか守られてた女の子が深くお辞儀をする。

しかしそれを終え、俺と視線が合った瞬間目をパツと見開く

「ねえ、愛紗ちゃん!!! この人じゃない? 私達を救ってくれる天の御使い様って」

「えっ!? どうして……。いや、確かに私達を助けてはくれましたが」

「だって、この人こら辺では見ないような服装してるじゃん。しかも強いし。やっぱりあの占い師さんの言ってた人だって!!!」

何か分からんが、この子暴走しているなあ……。いったんこの黒髪の子の話も聞いてあげようよ?

「ああそうだよ!! 名前に海って付いてたら、天の御使い様だったよね?」

「ええ、確かそんな事を言っていましたね」

「よしつ。ねえねえ、お兄さん。私はね、姓は劉、名は備。字は玄德って言うんだけど、お兄さんの名前は?」

「俺? 俺は如月海斗って言うんだけど」

そう名乗った瞬間玄德? がパツと顔を明るくする。しかしそれと同時に、隣の黒髪の子が眉をひそめる

「えっと、失礼ですが如月殿。どれが姓で、どれが名で、どれが字ですか?」

「はっ？」

何？ 姓と名と字？ 何だよそれ。苗字と名前とミドルネームって事なのか？

どう見たってこの子達アメリカとかそっちの方の人じゃないだろう。

「姓が如月で、名が海斗。字ってのは良くわかんない」

「字が無い？ では失礼ですが真名はお持ちですか？」

「えっと本名を名乗ったんですけど？」

そう言ってますます玄德は顔を明るくする。そしてそのまま俺の目の前に歩み寄ってきて、そのまま俺の手を握り締める

「ずっと待ってました、ご主人様！！」

「ふえっ！？」

「ああ、私の事は桃香って呼んで下さって結構ですよ」

「桃香さま！！」

そう叫ぶと、近くに居たもう1人のちっちゃい子を連れてそのまま俺から距離を取る。何かやったかなあ？ 俺。時折俺の方をちらちらと見ながら、話し合っている。そしてそのまま3分くらい経ったのだろうか？ やっと俺の所に戻ってきた

「私の姓は関、名は羽、字は雲長。真名は愛紗です。よろしくお願  
いします、ご主人様」

「鈴々は鈴々なのだあ!!」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ!! とりあえず色々と説明をしてくれないと、意味が分からん」

「それもそうですね」

そう言つて黒髪の子が、俺に説明を始めた。  
要点をまとめると……

- ・ 名前は姓、名、字とあつて、その他には自分と親しい人にしか教えない真名と言つものがあるらしい。
- ・ ここは三国志の時代らしい
- ・ 占い師に自分達はどうすれば言いか聞いたら、3人を助けてくれる人が現れるからその人を頼れ。その人は突然現れるから、名前を聞いて海と言う文字が入っていたらその人が天の御使いだ
- ・ 彼女達はこの戦国の世を変えたいらしい  
などなど……

「で、俺がその天の御使いだと」

「ええ、そうです!!」

別に悪い気はしない。この子達は自分の為ではなく、みんなの為に色々しようとしている事を聞いて手伝つても良いと思つた。どうせこの世界からの脱出方法が分からない以上、何もしないなんて退屈な事は無いしそれにみんなを見つける事もしやすいだろうし。

そして何より、この子達の名前。いくらなんでも知つていゝぞ。劉備、関羽、張飛、どれも蜀という国を担っていたヤツらじゃないか。

まあ女だけど

「俺で良いのか？ 世界を変える力なんて、これっぽっちも無いぞ？」

「確かに1人では何も出来ません」

間髪を居れずに、桃香が答える。それも先程までの笑顔をの顔じゃなくて、本当に真剣な顔で

「私達も3人だけじゃ少ししか変えられないって、イヤと言う程分かりました。だからご主人様の力を借りて、そして仲間を増やしてみんなの力でこの戦乱の世を変えたいんです。だから、力を貸してください！！」

その言葉には、正直グツと来た。1人じゃ何も出来ないが、みんなでも何でも出来る

よし、みんなを集めるまでは……、いや集まってもこの子達の願いが叶うまでは一緒に居よう。それが俺の、天の御使いとか言う役目だと思っから

「分かった、協力しよう」

「あ、ありがとうございますっ！！ じゃあ急いで誓いの儀をしなくちゃ！！」

「誓いの儀？」

「ええそうなんです！！ その占い師さんが言うには、天の御使いを見つけたらみんなまで目標を誓えて。そうすれば願いが叶うはず

だからって」

ニコニコしながら俺の周りに集まってくる3人。そして自分達の武器を、おもむろに天に突きつける

そしてそのまま桃香が静かに呟き始める

「我ら4人、姓は違えども兄弟の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、困窮する者たちを救わん。上は国家に報い、下は民を安んずることを誓う。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を」

そしてこれが、俺の、俺達のこの世界での戦いの始まりになるとは、まだこの時俺は知る由も無かったのだった。

〈真・真剣恋無双 予告PV〉

始まる戦い、迫り来る脅威

「斬って下さい、ご主人様!!」

「でも相手は人間だぞ!？」

「その甘さが、いつか自分の首を絞める事になります!!」

始まる政治と小さな居場所

「私の名前は諸葛亮、こちらは鳳統です」

「おいおい、これは……」

「よろしくねっ!!」

戦いの中で集まる、ファミリーの仲間

「久しぶりだな、桃香、星」

「おやおや、これはこれは白連殿。何とか逃げ切ってきましたか」

「ああ、お前が居なくなっただせいで色々大変だったが彼のおかげで」

「お前は……」

「よう、海斗。久しぶり」

「大和!!」

しかしそれは、同時に自分達の仲間とも戦場と言う場所で再会する  
きっかけにもなるので

「京、クリス！？ 何でお前達が！？」

「悪いけど今はこっちに付くしかないの。ゴメン、海斗、大和」

「犬、自分は自分の正義を持ってこのまま突き進む！！」

そして不幸は突然降りかかってくる

「条件は何なんですか、曹操さん？」

「そうね、彼を、如月海斗を貰おうかしら」

「ッ！？ それはいくらなんでも出来ません！！」

「いや、いい。変な事はするな。曹操さん、俺が行けば本当に条件を呑んでくれるんですよね？」

「もちろんよ」

その運命はある意味幸運で、ある意味残酷で

「何で、お前が……！？」

「助けに来たんだよ、お前を。お前達を」

集うファミリーの仲にも亀裂が入っていき

「もうだめだ。アイツらを信用することなんて出来ない」

「馬鹿な事言つなよ!! 仲間だぞ!?!」

「でもっ……………」

ヒーローの存在すらも霞んでいき

「キャップ?」

「ダメだ、海斗。俺にはもう何も出来ねえ……………」

「キャップ…………」。お前がそんな弱気で、みんなはどつするんだよ!  
「!」

「でもよお……………」

そんな彼らは沢山の事を経験して、1つの場所へと集まっていく。  
赤壁へと

「まずいよ、ガクト!?!」

「どつしたんだよ、モロ」

「もうすぐ始まるんだよ、戦いが!?!」

「へっ!?!?」

「赤壁の戦いだよ!!」

そしてそこには最も残酷で、ある意味分かっていた結果がそこにはあつて

「やっぱり、ここかよ。モモ先輩」

「ああ、やっと来たか」

「アンタを倒さないと、前には進めない。どいて貰いますよ、モモ先輩!!」

「やってみろ、海斗オ!!」

ファミリー達と、この三国の運命を揺るがす大きな戦いが今始まる  
真・真剣恋無双 この秋、連載開始……するかも？

(後書き)

はい、と言うわけで初めての短編です。何を言おうが初めてです

この中で出てきた如月海斗は、私の書いている真剣恋の二次創作の  
なので興味がある方はぜひ読んでみてください。

それでこの作品は一応ここまでですが、続編などを希望される方が  
居ましたら連載するかもしれません。

でわ、また何処かで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1615w/>

---

真・真剣恋無双

2011年10月9日15時00分発行